

胎児の大きさの測り方



まず大横径を測ってみましょう。これは難しくありません。胎児の頭部に異常がないなら、どの胎児でも同じ場所で頭部断面像を描出することは、さほど難しいことではありません。意識してやっているうちに必ずできるようになります。気をつけることは頭を斜めに切って計測していないかどうかです。つまり左右対称に写っていることが条件です（**図1**）。

胎児の大きさ（体重）をみるのに大事な計測部位は何といっても腹囲です。そして計測の仕方が難しいのも腹囲なのですが、ここではあまり難しく考えず、胎児のおなかの断面が丸く写るように描出してみましょう。大きめのソーセージを正しく直角に切ることを考えて下さい。断面は丸くなるでしょう。断面が長丸になっているときは、胎児の腹部を斜めに切っているか、つい力が入ってしまっ、胎児をプローブで押さえつけているのかも知れません。腹囲は断面が丸くなること、心臓や腎臓が写っていないことが大事です（**図2**）。いくつか腹囲の断面を測ってみてください。そのうち一番小さな値の断面が正しい腹囲と考えていいでしょう。あとは大腿骨長ですが、これは簡単です。腕の骨と間違っさえいなければ、まずは上手に計測できているでしょう。

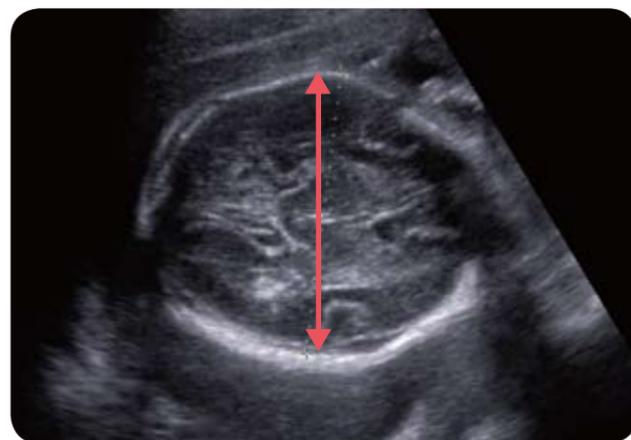
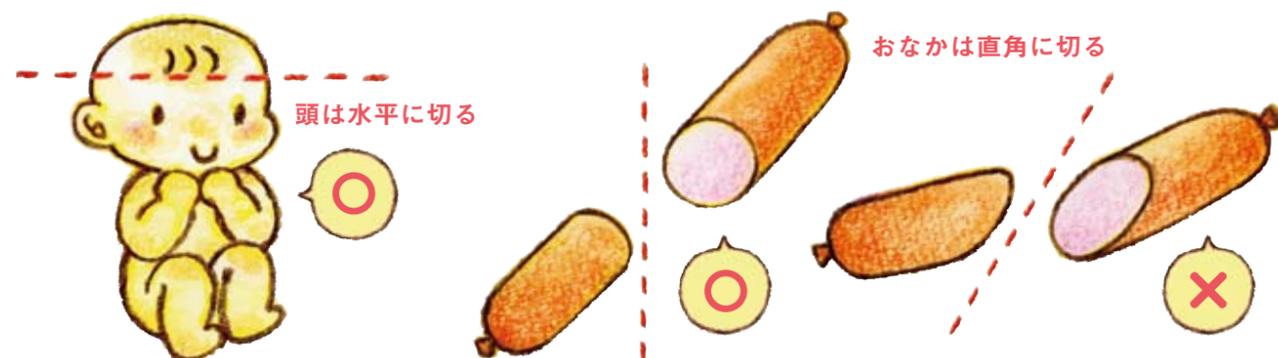


図1 大横径（BPD）を計測する断面

胎児の頭部を水平に切った断面で、頭の横幅を計測した値が大横径（→）。左右対称であること、つまり頭を斜めに切った断面ではないことが重要。



図2 腹囲（AC）を計測する断面

腹囲を計測する断面は、とりあえず丸く写っていることが大事。胃が写っていて、心臓や腎臓は写っていない。

推定体重は当たりますか？



ところで大横径と腹囲（さらに大腿骨長）から求める推定体重は、胎児が正常発育をしているときは大変よく当たります。なぜ当たるのでしょうか。考えてみてください。私たち大人の体重を、帽子のサイズ（大横径）とベルトの長さ（腹囲）と靴のサイズ（大腿骨長）から当てることができるでしょうか。まず無理ですね。ではなぜ胎児の推定体重はそれなりに当たるのでしょうか。

それは胎児には私たち大人のように極端な体型や体重を示すものが少なく、平均的な大きさの胎児が圧倒的に多いからというのが（他にも考えられる要因はいくつかありますが）ひとつの答えです。胎児の大部分は平均的な発育をします。一方、頭ばかり大きいとか、頭がまん丸（あるいは長頭）だとかいう胎児の推定体重は当たりません。大きすぎる胎児も同様で、巨大児などは誰が計測しても当たらないのが普通です。ですから胎児の大きさを知るには、当たらない推定体重よりも、大横径、腹囲、大腿骨長のそれぞれを正しく計測して評価するほうがより大事だと思います。つまり発育表に発育経過をプロットすることで評価することですね。

胎児の発育は停止することはあっても、小さくなることはきわめてまれです。計測した大横径や腹囲が以前より小さく測られたときは、自分の計測方法が正しいかどうかもう一度振り返ってみてください。

